

だいぶ夜も更けた頃、熱狂的な盛り上がりを見せていた宴会はお開きとなった。

酔客達が三々五々にそれぞれの部屋へと散っていくと、ガラんとした宿の食堂はそれまでの騒ぎが嘘のように、本来の静けさを取り戻していた。そうだった。一瞬どこにいるのか忘れそうになっていたがここは中国の奥地、標高4000メートルにもなる山中に暮らすチベット族の小さな小さな村の中なのだ。最初のうちこそ中国人旅行者達との宴会を一緒になって楽しんでしたが、仕舞にはまるで都会の喧騒をそのまま持ち込んだような騒ぎにいささか辟易した気持ちになりかけていた私は、その静けさに気持ちが安らいだ。宿の主人は照明を絞ると、薄暗い食堂のテーブルの上に散らばった食器類を一人でカチャカチャと集めて片付けている。

先程の喧騒の余韻を引きずったまま部屋に戻る気持ちにはなれず、亜丁村の静かな夜を取り戻した食堂でもう少し過ごしていたかった。いつの間にもやって来たのか、宿の主人を訪ねて来ていた近所のおじさんらしき人と二人でストーブの脇に腰掛けてポツリポツリと話をした。時おりストーブに薪をくべ、チロチロと燃える炎を眺めながら土地の人と他愛の無い話をして過ごしていると、時の流れもゆったりと速度を落したように感じられて心が和んでくる。やっぱり旅の夜はドンチャン騒ぎよりも、こんな風に過ごす方が私には合っていた。

窓の外からはまだ雨の音が聞こえていた。無駄とは判りながらも諦めきれずに時計に目が行ってしまう。時計の針は既に深夜の11時を過ぎようとしていた。山奥の小さな村にとってはずいぶん遅い時間だろう。あの少年はもう眠ってしまったかな……。せっかくの再会を果たしながら、懐かしい友人と共に過ごす機会を逸してしまった後悔に胸が痛んでいた。今日一日の出来事や少年の事を想っているうちに、ふとある考えに思い当たった私はハッとした。もしかしたら……。夕方宿を訪れた少年は、私に会いに来てくれたの？

昨夜の会話がボンヤリと甦ってきた。明日はバイクと一緒に遊びに行こう……。少年はそう言っていた。だが、このような土地での口約束など大した意味を持たない事を何度も経験している私は、後でガッカリしてしまうのを避ける為、そういう話にあまり期待は持たない事にしてたし、雑貨屋で出合った時のちょっぴり素っ気ない少年の素振りからも、昨夜の会話はその場で彼が親愛の情を表したかっただけの言葉だろうと理解していた。

どうせやんちゃ盛りの年若い青年である彼が、私なん

かと遊んだって楽しい訳がない……。夕方少年が宿に姿を現わしたのも、友人と遊んでいる通りすがりに「今日は知り合いの外国人が泊まっているから、ちょっと寄っていきこうぜ」という程度の軽いノリで立ち寄っただけに過ぎないように思っていたのだが、もし……。彼が昨夜の約束を果たすつもりで、友達を誘い私を訪ねてくれたのだとしたら……。昨夜の約束など無かったように他の旅行者達の仲間入りをして、少年よりそちらとの付き合いを優先している雰囲気の人に、彼は彼でちょっと失望していたのでは……。本当のところはどうだったのかは少年に聞いてみなければ判らない。

でも、もし私の思いつきが当たっていたとしたら、私は彼に対して失礼な事をしてしまったんじゃないだろうか……。「やっぱり君も普通の観光客と一緒になんだな……」そんな風に思われてしまったのかも知れない。バイクで転んだ時に擦りむいた手のひらの痛みが、自分のバイクを壊されても温かい言葉をかけてくれた少年の優しさを思い出させて、ちょっぴり切ない気持ちになってしまった。

「さあ、もう遅いから休む事にしようか」食器の片付けを終え、一緒にストーブの前に座っていた宿の主人の言葉に促されて椅子から立ち上がった私は、食堂を出て自分の部屋に戻る前に宿の玄関のドアを開け、未練がましい気持ちで雨のそば降る亜丁村の夜の景色を眺めていた。後で戻ってくるって言ったのに……。最後に私を振り返り目で合図を送ってくれた少年の姿を思い返しながらか夜の闇を見つめて、少しばかりセンチな気分になっていたその時、「小姐、何をしているの？」と背後から声をかけられた。

振り返れば先程の宴会で妙に熱い視線を投げかけてきていた石頭だ。あ～あ。また、あなたなの？ お呼びじゃないんだけど……。せっかく乙女なセンチメンタリズムに浸っていた私は邪魔をされなくなかったが、私の気持ちなど露知らずに、石頭はすっかりほろ酔いでいい気分になっているらしい。相変わらず熱を帯びた視線で近づいてくると、更に熱を帯びた口調で言った。

「明日の亜丁自然保護区には勿論君も行くんだろう!？」

「でも、私はもう4日もあそこにて此処まで戻ってきたんだし……」

私が答えようとして声を出しかけると、石頭は慌てたように唇に人差し指を当て「しい～っ!もうみんな眠っているから外で話そう」と私をドアの外に連れ出した。

だが宿の表は先程からの強い雨が降り続けている。

「だって濡れちゃうわ」

「さあ、車の中へ」

彼は自分たちの豪華な4WDのドアを開けると車の中に私をいざなった。何なの、この状況は？ウツカリしているうちにまんまと密室で二人きりにされてしまった。一人、雨のそぼ降る亜丁村の夜を見つめながら、少年を想ってしみじみしていたかったのに、とんだ邪魔が入ったものである。

「ねえ、明日は一緒に行くだろう？俺たちと自然保護区に行って、そのまま稲城か理塘まで一緒に車に乗って行けばいいじゃないか」

「うう〜ん・・・」

今回の旅の中で、亜丁自然保護区の章は完全に終結した気持ちになっていた私だったが、実は、宴会の最中から何度も繰り返し誘われているうち私の内心は徐々に軟化しており、この時点では既に行きたい方向に80%くらい傾いていた。

何と言ったって、やはり私はあの場所に強い愛着を感じているのだ。行かれるチャンスがあるのなら何度だって行きたいし、今回訪れた湖は2回ともお天気には恵まれず、一番美しい状態での風景は見る事が出来なかった。今日これだけ雨が降って、もし明日がピーカンの快晴になったら・・・そう思うと、輝いている青い湖が脳裏をよぎった。それに加えて公共の交通機関の無い亜丁村から稲城までの道のりをどうやって戻るかは、亜丁村で途中下車した時からの一番憂慮されていた問題だ。先を急ぐ訳でもない旅をしている私にとって、彼らの熱心な誘いは私にとってもありがたい事であり、無理に断る理由は何も無いのだった。

「そうね・・・行ってもいいかな」

何回目かの熱心な誘いの言葉に少し間を置いて、私は答えた。

「本当かい！？よお〜し！話は決まった！明日の朝は一緒に出発だ」

声を弾ませる石頭に

「それじゃ、話が決まったところで部屋に帰りましょよ」

と二人きりで車内にいるのがどうも息苦しい私が車から出ようとする、

「ちょっと待って。もう少し君と話したい・・・」

と石頭が私の腕を取って引き止めた。

「え、え？」

「さっきは誰と話していたの？君の知り合いかい？」

「知らない。多分近所のおじさんじゃない？」

「ええ？知らない人と話してたの？」

「だって、私は土地の人と話をするのが好きなんだから。せっかく他所の土地を訪れたのなら、その土地の人と話がしたいわ」

「じゃあ、俺とは話をしたくないの？」

彼が身を乗り出してきた

「いえ、別にそういう訳じゃ・・・」

「いや、君は俺とは話したくないんだ」

彼は大げさな素振りですげに顔をゆがめると、首を振りながらうつむいて見せた。

「そんな事無いってば！」

内心は鬱陶しい奴だと思いつつ、先程はすっかりご馳走になってしまった手前と今後も稲城まで車に乗せて貰うなどのお世話になる立場としては、やっぱりちょっとは気も使うのだ。

「本当？・・・本当かい！？ じゃあ言うけど・・・今日初めて君を見た時ハッとしたのさ。君は俺の前の彼女にそっくりなんだよ。今日ここの宿に泊まる事を決めたのも君がいたからだ。・・・始めて会った時から、俺は君から目が離せなくなってしまったんだ」

ぎよえええ〜・・・！！ 昔の彼女に似てようが似まいが、そんな事は私に何の関係も無いし、つまり石頭はフラれた彼女が恋しいだけなんじゃ・・・？唾然とする私にはお構い無しに、勝手に一人で盛り上がっている石頭は、身体を寄せてくると私の手を握り自分の胸に押し付けて言った。

「君を・・・好きになってもいいかい？」

ば、馬つ鹿野郎おううう〜！！！！今、私が一緒に居たいのは・・・お前じゃなあああああいよいよ！！私の腕を引き寄せ、顔を寄せてこようとする石頭をかわしながら私は心の中で叫んでいた。よりによって少年の事で胸がいっぱいなこの時に、まるで悪い冗談みたいなこの展開は何なんだ〜！？

「旅先で出会った外国人同士で、あなた何を言ってるの？」

「そんな事、関係無いさ！」

「大ありよ！！それに明日自然保護区に行くなら、もう早く寝なくっちゃ。宿に戻りましょ」

何の興味も無い、酔っ払いのたわ言に付き合っているのが面倒になった私は、まだふにやふにや言っている石頭に構わず車から降りた。神様にからかわれているかの様な自身の境遇には失笑するしかなかったが、この程度の事では、一旦行くと決めてしまった自然保護区に行く

気持ちは揺らがない。明日こそ晴れると良いのだけど・・・

翌朝は6時に宿の食堂に集合の約束だった。

セットしておいた目覚まし時計で目を覚ました私が穴倉のような部屋から這い出して表を見ると雨は上がっていて、亜丁村は紫色の朝もやに包まれていた。幻想的な風景だ。山に行く身支度をすませて食堂に行ってみると北京軍団のメンバーも起き出してはいたものの、何だか様子はパツとしない。特に石頭をはじめ、昨夜勢い良く強い酒の杯を飲み干していた数人はグッタリと青い顔をして頭を抱え、口元を押えて見るからに具合が悪そうだ。

ははぁん・・・昨夜は人の忠告も聞かずに高所で強い酒を飲み過ぎた為、みんな高山病と二日酔いにやられてしまっているという訳だ。石頭は私の顔を見るとキマリ悪そうに小さな声で「おはよう」と言った。昨夜の事など、どうせ酔っ払いのたわ言だと思っている私にはどうという事は無かったが、石頭は私と顔を合わせるのとはとてもバツが悪そうだ。

結局、昨夜全員の荷物を担いで歩くと気炎を上げていた石頭と北京グループのリーダー、その奥さんと子供の4人は自然保護区には行かず、このまま車で稲城に直行するという事だった。私は残りの料理長と調理補助の男、そして昨夜の宴会では私の隣に座っていた、一番落ち着いた物腰のスン・シャオドンという人物の3人ともう一台の車で自然保護区に向かった。既に3度目だと言うのに、あそこに向かうのだと思うとワクワクしてくる。ややグッタリしている北京軍団の面子を尻目に、結局、一番ノリノリなのは何を隠そう私である。

空の様子はうす曇りだ。快晴は望めなさそうだが、どうやら雨の心配は無いらしい。自然保護区の入り口で北京軍団のメンバーは当然のように馬を調達したが、私は徒歩だ。往復の騎馬料金200元は、この先も続く旅を想えば少しでも節約しておきたい。私の前をトコトコと馬に跨っていく北京軍団の後をワシワシと追い駆けて歩いている私。何だか可笑的。普通は立場が逆じゃないの？そんな時、道に立っていた老人がニコニコしながら声をかけてきた。

「小姐！！馬は如何かな？」

亜丁自然保護区では、入り口の管理棟で行政に管理されている馬しか営業できない事になっているので、この老人はモグリの馬方だろう。冷やかし半分に「いくら？」と聞いてみると90元と答えた。

「不要！不要！（ブーヤオ！ブーヤオ！）」

手を振りながら通り過ぎると、値段を尋ねた事で脈ありなお客と思われたのか、老人が後ろから追い駆けてきた。

「小姐！小姐！幾らだったら乗るんだい？」

うーん、そうねえ・・・北京軍団は馬でトコトコと先に行ってしまうし、このまま洛絨牛場まで追い駆けて歩くのも結構しんどい。

「50元かな？」

「60元だよ、小姐！」

老人も商売が苦しいのか、なんとなく大幅な値引き価格になったので、ここは一つ奮発して馬に乗ることにした。乗ってみればやっぱり楽だし、家老を従えたお姫様気分だ。馬方の老人は明るい性格でおかしな冗談を言っっては私を笑わせ、途中までは楽しい道中だったのだが、道半ばで雲行きが怪しくなってきた。暫くすると道の先の方を伺うようにしていた老人が、「小姐！ちょっと馬から降りて。ワシから離れて歩いてくれ」と頼むので馬を降り老人と馬の少し後ろを歩いていると、前方に管理人の腕章をつけた男がいた。ははぁん、なるほど。あれに見つかったらモグリの営業がバテしてしまうという訳だ。

管理人の前を通り過ぎると私は再び馬に跨ったが、老人がビクビクしながら歩いているので落ち着かない。暫く行くと再び馬を降りてくれと頼まれた。道は昨夜の雨でドロドロだ。老人はとっとこ行ってしまおうし、泥に足を取られながら追い駆けていくのも容易じゃない。何じゃ、こりゃ～！！せっかくお金を払ったのに、ちっとも楽じゃないぞ～！！これでは老人に騙されたようなものだが、時折ニヤニヤしながら私を振り返り、コソコソと挙動不審な態度で道を行く翁の姿は妙に憎めなくて苦笑してしまった。

靴をドロドロにして汗をかきながら山道を登っていると、前日の自然保護区で私が何度も顔を会わせていた管理人二人が芝生の上でチベット族の少女達をはべらせて、のんびり寝そべっていた。片肘を付き、眠たげな薄目で私を見ると、「オヤ、小姐じゃないか。まだここに居たのかい？」からかう様に声をかけて来たのを思いっきり無視して通り過ぎたが、憎悪の気持ちがこみ上げてくる。

コイツらはこんな事してて行政から給料貰ってるのか～。行政の利益の手先となる役人が、概ね鼻持ちならぬ奴なのはどこの国でも同じらしい。フン！嫌な奴ら。どうせ村人には権力を傘に威張りちらし、時には賄賂なども受け取ったりしながら、のらりくらり暮らしているに違いない。前日は憧れのホーストレッキングを邪魔された逆恨みもあって、想像で勝手に憎らしいイメージを膨らませ、その怒りのエネルギーで、やけくそのようにガシガシ歩いた。

結局なんだかんだで、道のりの半分くらいは徒歩で歩いてしまった。激安価格のつもりで雇った馬は、買い物に例えればまったく安物買いの銭失いだ。今後亜丁に向かう知

人がいたら、ぜひこの教訓を伝えてあげたい。

「亜丁自然保護区では、馬に乗るなら正規品」だ。老人を睨みつけながら恨み事を言ってみたが、やっぱりニヤニヤしながら謝る老人はちょっと憎みきれなかった。一足先に洛絨牛場に到着していた北京軍団と合流すると、3人のうちスン以外の料理関連メンバーは更にグッタリとしている。出発点より標高があがった為に高山病が悪化しているらしく、そそくさと曇り空の牛場で記念写真を撮ると、このままスグに下山したいという。

ええ～!! せっかく此処まで来たのに～?

まったく先に稲城に向かった石頭達といい、こいつらといい、せっかく亜丁までやって来て、酒の飲みすぎで肝心のところは見逃してしまうなんて馬鹿みたい。ここまでやって来たらぜひ湖を目指したい私だったが、これでは行かれる訳も無い。ただ1人まともな状態のスンにだけでも、もう少しこの土地の美しさを知って欲しかった私は、せめ

て道の最奥にある央邁勇ヤンマイヨンの麓の湿原まで行こうと説得すると、二人で道の奥を目指した。

残念ながら曇り空の中に頭を隠していた央邁勇ヤンマイヨンの全貌は望めなかったが、それでもスンは風景の美しさに感動しているようだったので、私は少しホッとした。昨日北京軍団と出会った時から、亜丁の美しさについて語り続けてきた私だ。これでちょっとは面目躍如できたに違いない。

スンは言った。

「ありがとう小姐。確かに素晴らしい景色だよ。君が居なかったら俺は絶対にここまで来られなかった。君に感謝するよ」。

この土地で知り合った中国人旅行者からこの台詞を聞くのも既に3度目だ。もうこの土地に骨をうずめてガイドになっても良いくらいじゃないか。次はいつ来られるんだろう・・・。長い長い亜丁での一週間の様々な思い出を噛み締めて、私は湿原の風景を眺めていた。

